

四季草

冬

七

漫筆雜考

和書門			
二〇七八二	六八二	七八〇	七八〇
類	號	函	架

內閣文庫		
二〇七八二	七八二	和書
類	號	冊
一八	一八	函架

內閣文庫	
番號	和 20782
冊數	7 (7)
函號	153 293

漫筆雜考

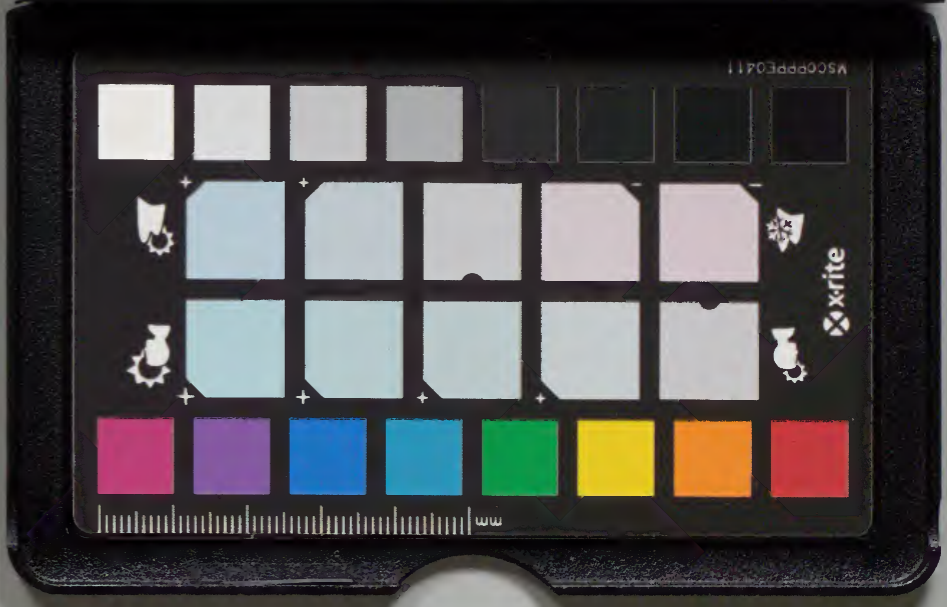
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





冬草

目錄

空穂考

矢壺考

三 膳 釵考

四 蝦夷少口廿七考 分 繪系

又 甲冑名考

六 洗皮履考 分 洗系 減

七 弓村考

分 檀梓拓槻榎の考

淺草文庫

此時花鳥も維久々画きたり奥列十二通全戦の
繪も空穂作なり或をて画きたり或はよゝ美家
朝臣等の節成んく空穂を傳へてと云又ハ
筆成入て禱りよ折んぬり作さしと云ハ筆之
る美光空穂より筆の僅成れぬ所なりと云
と傳へ傳へたりやあはれ哉

一 美家を好む言者中よまう川部の 根平ハ加
まるとしと云りやそり作さしと云ハ筆之
又と云ひしと云ると云ふなりや一を傳へて
さると云り人そり又何矢と云うなりも人よ知

一 只んを射りたりと云り人よあはれぬそのおよ
むりの人好むを美家のよりやの如く作ありて
皮とを牛之とれも空穂ハ何皮とをてと云
空と云ると云ふなり又或はふじやハ川と
つらあはれと云ふなり下りなり小穂を伝へると
よみ又と云ふと云ふ建能ハ何なりやたけり物成
繪画よあはれと云ふけり川と云ふ物なまよたの名
んえん又陰あはれと云ふ川の形古画と云ふ
是ハ美家の後より川部の根平ハ何と云ふなり
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

高後ヤ〜ゆゑん

一 空穂と名付し〜ゆゑんを和名ゆゑんは毛皮を言
 たり作粟の穂がともほし〜ゆゑん空穂と名付し〜
 東照是杖六 貞應二年九月廿九日の条 まいね並の字尻可ひ〜
 是ハ羽と弁と並の刻後羽ひ〜 是ハ矢の穂と
 今並みれハ杯とゆゆんハ却分兼〜 院名〜
 又靱の字尻〜川不比字とすハ 傍ハ 卍字ハ靱
 ゆ〜ゆ〜是ハゆ〜と〜字〜靱ハ形異ゆゆ〜
 川不比ハ空穂の二字尻并ゆ〜
 一 毛皮と名付し〜ゆゑんを和名ゆゑんは毛皮を言

空穂と偽空穂と〜ゆゑんハ目如と名毛皮を
 たりも異名〜ゆゑん〜ゆゑん〜毛皮を〜
 体ノ夷ゆ〜ゆゑんハ〜靱ハ偽空穂と〜

一 ぞゆ〜空穂連一かえ穂り〜大川不比〜是ハ腰
 上ハゆ〜ゆゑんハ矢ゆ〜ゆゑんハ穂ハゆゑん
 休の者ハゆ〜ゆゑんハゆゑんハゆゑんハゆゑんハ
 一〜ゆ〜ゆゑんハゆゑんハゆゑんハゆゑんハ
 けゆのゆ〜ゆゑんハゆゑんハゆゑんハゆゑんハ
 ち〜ゆ〜ゆゑんハゆゑんハゆゑんハゆゑんハ
 是ハ空穂と名付し〜ゆゑんハ天子十二年
 是ハ空穂と名付し〜ゆゑんハ馬の書〜

天子此は後ふまひやう空穂河に於て社を此
わくハちりれとひやう抄とすなりとハ抄武
小八ふりとりつるも又武隈最後天正十八年
二月山田京西陣の時秀を云能成の隆有冠の
曹金の久磨身自のち力二振を記合此と後
空穂の上は信天一節として後身兼徳後の
弓と抄作弊とをそれとしてつる是是軒と存
如きこと也とひやうと後身兼れ之成後にて
初やハ焼川也を始と後かハはつと子抄を
小京山殿の比世よりハ焼川部也ハ尉官迄歎

えとふ人なり歎えたり五代の孫ハ焼川親忠と云
人なり永承をう長長との人ハ彼歎え入たりて
道標と号せし道標とハひやうと名なりて道
標ハ川をうりて焼川也なり作らばなりと云
なりハ希もつとあくとひやうハ殿ハ天子のひあ
りて地之を始ハ天文より親忠のよりありて是
より道標の作らばハはなりはよりて焼川也
年より道標始と作らばハ其割成也なり
たりと云きなりは是ハ他傳なりん是ハ希よりと
ひやうと云地なりと云標なりと云巧と云

一 傳りし 刻印書は傳へ来りしもの

二 志考

一 志をさしひるよふ事といふ物 或ハ其ノ説又 志ハ其ノ地ノ

代也老抄花鳥傳信 義経記 其ハ 志也地志也

紀元別性生古本 志抄集 布衣以上 儀一流也

史也少き人これハ 志ハ 志ハ 志ハ

知人し 志也 志也 志也 志也

志列乃よふ事也

一 平家物語 志ハ 志ハ 志ハ

志抄也 志抄集也 志抄集也 志抄集也

後鑑の抄梁河 中 小殿 志ハ 志ハ

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

志抄也 志抄也 志抄也 志抄也

相傳の中におもひ庇給ふは尋ねの乃僕物傳の
洋矢者おん腰當しん（言ふ中おまよふ所を
かましきりて）何れ建付しりてこれより前よりな
かりしこと後庇給過りしりてとらふ
教を念を考れは後庇給胡蘇之京りて
一取よりいひ又是おの振おとることしりて
さきも明けり又教経地よ若く流のゆるり
なりう腹巻し神身て胃の法でたをこれ矢より
さけりよ負かりてききき古物傳は後庇の矢を何れ
よ負りしりては是ハその矢を何れより負はと

何れいひて 志こと後一物よりさるべき
一今昔より市の志こと割り何れ物々古代の
志を成えしれは何れ古制りて 傳よせん教経
化よ志この矢を何れより負りしりて
なれい今の志こと何れし何れより何れい今
の志こと上代の志こと何れしりてききされた
花傳書 惟人の志事りて 好之年全戦の信しれ
光伝り画きりて 一吾全戦の信しれ始りて
古代の画工の志りて全戦の信しれとらふ
い何れ何れりてさるる何れいしりて

ふきき装束抄 陸奥の四記よし 並をなす人の
るは此並とのと記し 又貞並と記せりゆ
同族なりやよとことし字を何よりと矢記又
尻記をて音訓とく書されし実ハ
よ書ん並胡麻のり紙をこつてくは阿のや
す胡麻ハ負くさぬ ころよあましく並胡麻
負くさぬハ かりよあましくさるさるし負されハ
矢板おし難く 古画の武者の並胡麻負し
さぬハる川さるしとそそえく 義経記よさるの
矢る川さるしとそそえく 矢はけはやまの

半しそや阿のんる川さるしとそそえく
矢吉の さるしとそそえく 矢板の矢る川さる
小負ありしとそそえく 矢板の矢る川さる
くはさるしとそそえく 負しとそそえく 又あま記し
り物記しよしとそそえく 矢板の矢る川さる
竹の筒とそそえく 並をなす人のあま記し
たつとやりしん 古代とそそえく 阿ハ矢胡麻の
一名は 阿の推量とそそえく 推量ハ阿の
足さる 並の筒とそそえく 矢と記し 矢と後
顧の部とそそえく

是壺胡籜之類
 一名矢壺と云ふ也



壺胡籜之類

此器ハ裝束品或ハ是ノ類
 之類トシテ諸君ヨリ人負之



二 簡叙考

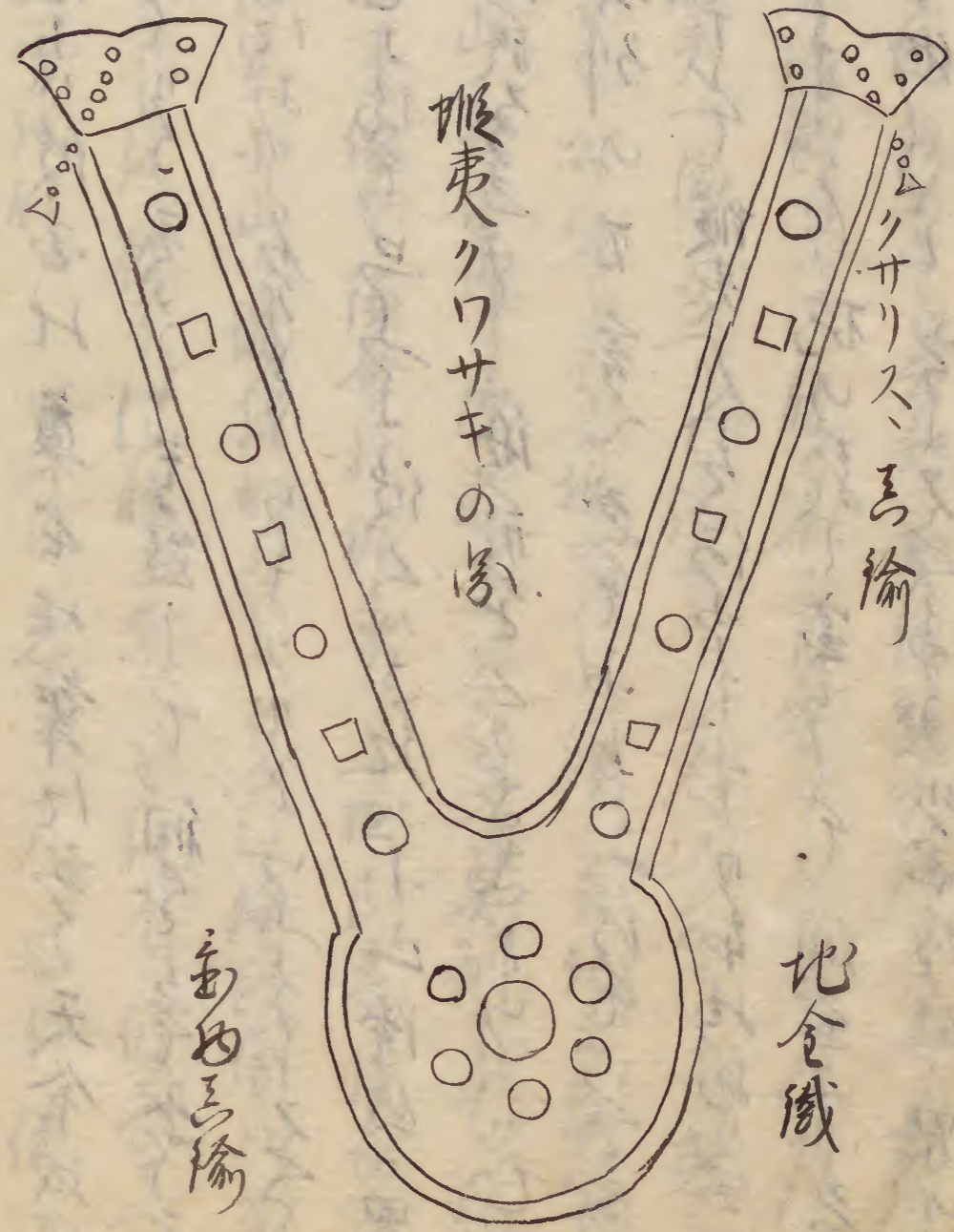
一 凡そ刀小勝をさしあへし物も小勝叙として名は
何故は小勝りて名もも考ふ小勝叙ハ大方
又ハ純カと申してさへ亦面汁を叙の如く飾る
小勝りの名は是儀カとす若くは威儀を加
えりて武備の名も申しは何れも是凡官に
あ官あり又友とすハ治世の事と考ふ又は威儀
はふす川ハ友と云武友ハ推考の礼と法事と
考ふ朝廷威儀を履きし事と云ふもつりさるる友と
武友とす又又友とて武友と帯する人の名

と佩ちりて文官ハ名刀帯するもの且武官ハ必
太刀或帯すは是定むる法也又武友と兼人と
すも太刀或威儀と助人もは儀と名刀と
佩事はかりし事あり何れも是と勅授帯叙と云
世勅授帯叙の人ハ又友とて武友と何れも是
本刀又ハ純カとす叙の如く飾りし事と
帯叙として之去御門大納言通方の名も
得抄よ古物帯叙大納言也と記し今本と
三刀と申しはしる本刀と申すは之彼通すは
曆仁元年 壬午 壬申と書し之今通すは此

後小治政と申すもの解くところと申すものありし
少く古物大略としてひて古物の書成取著されし
なり大略の二字ハ古物悉本口にもありは後カも
ありやハ大略とハしんを後カと後カ小ありハ
池カと申すはくはこれハ市ヶ友橋の古樹と云
む者系録へもくはくは時産稿家代々傳へるも
のまの梅云房前云の傍に記さるるて洋文に記さ
るると云く申すはくはと申す又傳寫しぬれば古
樹と同くハまの梅云の傍に記すハ又ハ名作と云
いふくは名作よりハ池カとありしと云き

一 気勝飯上古ハ本カ又ハ池カと云は飯の如く勝る
よ依て勝飯と存するの記之存代ハ及てハ本カ
池カとありしと後カと申すはよりありは傍り
記と云右系録云くハありしと記さるる也
一 勝抄と題するは古物勝飯大略本也といふ
又の也の字ハ又篇と云くは地とありはわく
あり又本他也と書しはわくは有是ハ皆傳寫此
記之西云條は勝抄ハ勝飯の系に類の大略
本他の中記せりといふハ彼勝抄の一本に本他と
ありは抄と記しはくは物れも彼一本に類の

波義位勢切記の喜院以松原の人を位と
 義位船夷海に事とつりなり 之を位とキリル
 とし志して義位の社と 又を船夷と云ふは
 と云ふありと云ふはと云ふは 何れハ
 義位此海より松原よりなりと云ふ
 又 甲冑名考
 一 加つと云ふは古名に日中記宗師云云地
 小崎人號其腕 甲處曰伽和羅 云々
 又古より此位と云ふ地より釣標其沉處者
 繫其衣中甲而河和羅鳴故號其如



本載字 甲と象と足とくけは極北の甲は東
 可より喜北始の前く動く之極北の字本の
 実業の字その場字とほくが中におお生とた
 ちかつられて育とあーそ育の成ふかつを
 いふれをわしり形小象とく中の字を併し是
 上古文字と併しよちとくそちのほり
 中のとくハち去のオの象形とよ併して
 のそれと形と一ハ育の生あしり形之育と生
 ちり此極北以て甲乙の甲と一と字甲とくく
 の象成はく甲胃 髀 甲ホの甲とそ是 物れハ
 かつくの象西と象むよかつくさす

一 かつくとりハくくわの象とくはれぬの物と項に
 かつくとり云つたあとのことかつくとり象とくは
 ハ空月ハはくそ極高是昧の物と極北とて
 小象オの甲とりく象の甲と成ふハかつく脊小
 腹とつくとりかつくとりハち極ふとらいうその極
 ちとくはくつとりハ極のくくくくハ胸の
 かつくとり
 一 かつくとりのとよりひとりのくくもを世れるよ
 何とく源順 和名抄よ甲れ象と叫く極
 之極 和名抄よ甲れ象と叫く極
 和名抄よ甲れ象と叫く極

六十一代村上天皇御宇天曆年中於人

一 甲又澄の字かきくハ和洲之よりハ 檜洲より

川ハ文字のよみとて之申洲ハ何の字かそとて之字ハ指
まの川とてハ 檜洲とてハハおまよハハあまよも 兼五子ハ
和の字のよみとて之申洲ハ何の字かそとて之字ハ指
又兼洲とてハ 兼洲とてハ何の字かそとて之字ハ指

故明て皇代ハ小幡旗一具とてハ二具と 二よりハ
洲とてハ又原申也後ハ出せとて ころハと何

又ハハ小幡とてハ何の字かそとて之字ハ指
屏風一よりハと何の字かそとて之字ハ指

ころハと何の字かそとて之字ハ指
具の字ハとてハ何の字かそとて之字ハ指

ころハと何の字かそとて之字ハ指

甲とてハと何の字かそとて之字ハ指
ころハと何の字かそとて之字ハ指

一 澄の事ハ 具とてハと何の字かそとて之字ハ指

ころハと何の字かそとて之字ハ指
甲とてハと何の字かそとて之字ハ指
ころハと何の字かそとて之字ハ指
故ハと何の字かそとて之字ハ指
右割の澄とハ 澄とてハと何の字かそとて之字ハ指
とてハと何の字かそとて之字ハ指

ふと其副別よりしるる方ハ河内皆よりいふ
くさくさしりあえ

一 かつこのより信也入るう本朝事始 あはれし初録す
始ハ信也と云

たより 加布止者以言加布良年止頃

やとりろハ宛きまうん あはれハ河内よりこの略

徳平よりかいらのふささ つるまのたのき成務で

そくえひしんあさい あはれハ河内より

一 ころれけと古代のまよハあふのまらひとよりか

化飲明天皇紀ノ頭漢の二字を河内のまらひと

河内本流ノ教り也此小頭漢ハ 多利如奈

云物としりて河内とよりハ河内之河内

一 ありりり河内河内者 カキリ 一とより河内

河内とより河内 徳アキヒ 一ハ色の字 河内

河内河内 一ハ河内 河内 一ハ河内

一のまらひとより 河内 一ハ河内

一河内とより 河内 一ハ河内

一とより 河内 一ハ河内

一甲の字 河内 一ハ河内

一河内 河内 一ハ河内

是ハ何れも其の略條之條の章と後章
 ことよといふ是退社の名ハ何れも其の式
 の伊勢参式といふ古き装束抄に云つたり
 日輪池天智天皇此池小桃花布と云ふ衣被
 令小桃花衫と云ふ衣被式の深心参式とい
 桃花布衫と云ふ百葉集の小桃花偈と有
 是ありと云桃花の二字を何れと云と列來き
 桃の赤れ色ハ落れぬといふ人多ク紅の色と洗
 退者といふありと云ふいふと云ふと云ふ
 ありと云ふと云ふ又百葉集小桃花偈の目お撰

長并之令小忌洗條布袍と云ふ是の之と云ふ
 其の洗條の略條がくも其の洗條ハ退社の
 するは知る一又百葉集小桃花偈と云ふ
 何れも其の何れと云ふ何れも其の字ハ列來
 何れも其の小用と云ふ古きハ何れ多ク古
 ると云ふ洗條と云ふと云ふ世の人多クハ
 何れも其の洗條と云ふと云ふ水小ひと云
 何れも其の小用と云ふ今洗と云ふと云ふ
 何れも其の何れと云ふ

一 節用集に云

節用集ハ唐人ノヤ字ニ依リテ書キハ
 陸奥天皇の臣の人之末定陽の子の名也

とらふまゝにけしきとちゆみハ
 漆をぬきし白あはてのゆを
 おゆみのあはれあはれの花
 実所へそしけつおむく
 あゆ皮けり紙の如く
 ほきこれハ木のこころ
 肌少ぬき

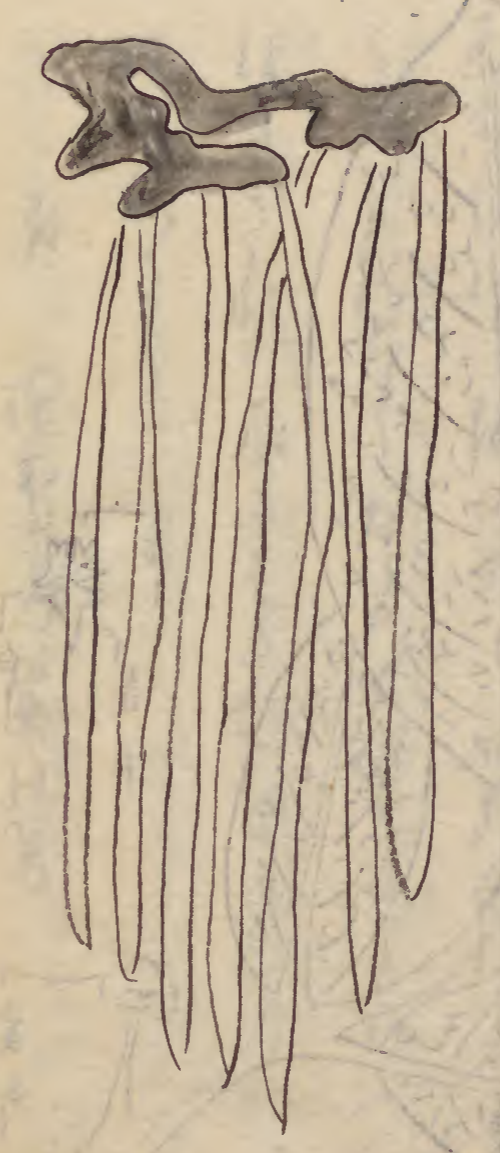
檀葉并實北島



一 様 片 古 事 記 和 紀 三 代 實 派 延 長 式 下 三 三 三 三 三

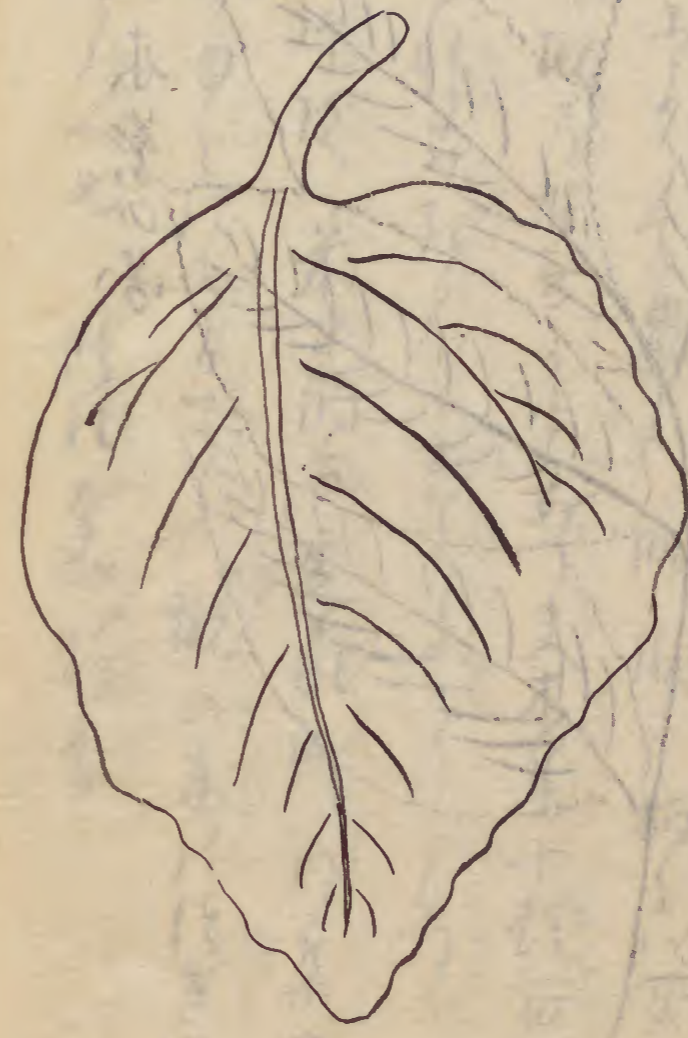
一 梓のあしを割りしるらん 和名あし梓 和名阿豆依と
 有り一名あしひさこ 又梓木のあしをてあし
 こと云又人角豆のあしをてあしなり也 あしけり云
 身木をて小桐に似たり 水理細く梓に似たり

梓木の實の形



一 概弓 日向紀之代室脈 延在式小えたり 日向紀
 小菟^ツ區^ニ申^ニ添^ニこ有り 是成秋日向紀小概弓と云
 キトク音也多入一^ツきと^ツけくとも 去るん是概
 のあしを割りしるらん 概あし業と云るを人のあし
 とい概ともゆれと似るんを^ツ身木ともあも
 かしと^ツか^ツら^ツ事^ツ肌^ツく^ツ外^ツた^ツ甚^ツに^ツ多^ツく^ツ大^ツ長^ツ此^ツ時^ツけ^ツ
 き此葉ハあ^ツの^ツ隈^ツ表^ツの^ツま^ツへ^ツ及^ツ上^ツて^ツ少^ツく^ツ中^ツら^ツあ^ツ
 概のま^ツあ^ツハ^ツ大^ツ長^ツも^ツた^ツれ^ツあ^ツく^ツあ^ツら^ツん^ツと^ツ此^ツ表^ツ年^ツよ^ツ
 中^ツら^ツあ^ツま^ツら^ツり^ツな^ツし^ツ是^ツ概^ツと^ツけ^ツき^ツ此^ツる^ツ之^ツと^ツ云
 又お^ツ概^ツ玉^ツ大^ツ山^ツの^ツ松^ツ人^ツの^ツア^ツし^ツハ^ツ概^ツハ^ツ此^ツあ^ツと^ツ云

一 胡こりりり之 和名物也 松 和名 至貞と有り 松の字係
つげとも
後之は松ハ
黄楊也 松ハ倍小即奈と有り 葉亦葉の葉に似て
 葉此されきれり之 之布 乃下 實上葉此實り
 似たり松と似く松が葉より地也之

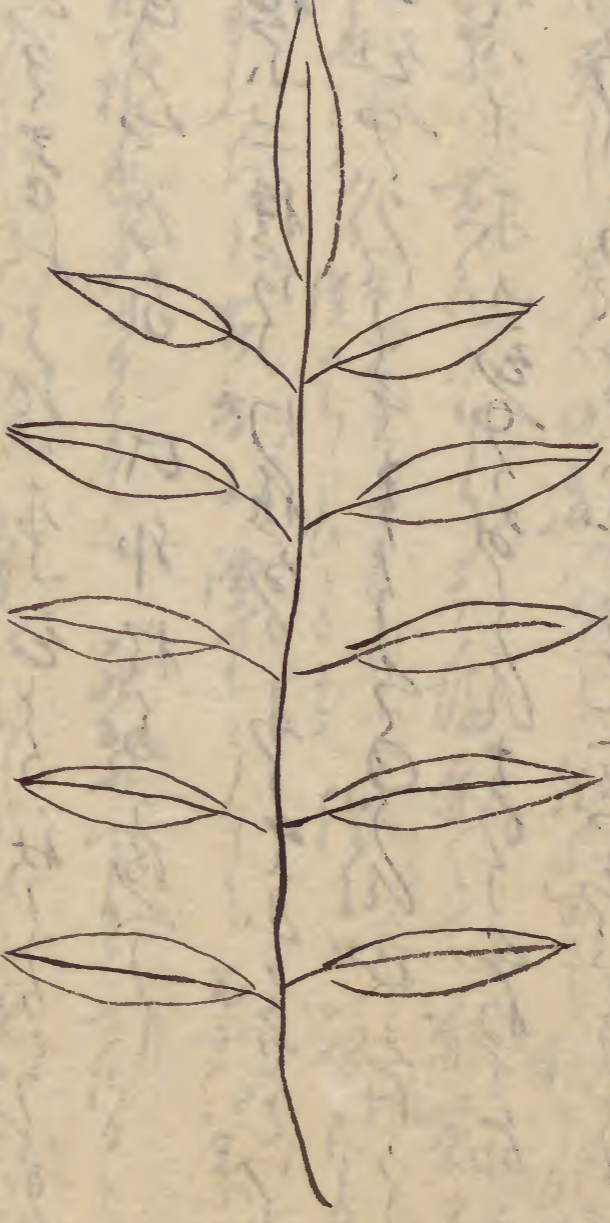


一 檣たけり 古の紀小天之波士らと見えたり 乃紀より
 天あま柁たけりと有り 檣たけと柁たけとけりともいふ 檣たけの字此
 乃紀りに柁たけの字成りたりを字に用ふる之 柁たけの
 書かりたり 乃紀の字成りたりを字に用ふる之 柁たけの
 字成りたりを字に用ふる之 柁たけの字成りたりを字に用ふる之
 乃紀りに柁たけの字成りたりを字に用ふる之 柁たけの
 檣たけハ古打小字き 樹きハ和名抄 深色
貝垂 文選に
 之檣 後改及和名
後途之 今蓋檣たけと云ふ 乃紀は後途之の中
 略して後途と云ふ 古抄も皆さういふ
 倍小を此木といふ 乃紀の畧也 今世も此木

此の葉は心の一才寸半ほどの長さありて割るに此
 の葉とあるはひて切る

檜木葉此の

長八寸



此の葉は
 身木小枝

是は少く画くは葉の大きさの如し



檜の葉は長くは
 是程ありて
 身木小枝

右の中ゆえに下の葉は形ハ生の葉と似て例
 多くありては武家より見たる人者ハ武
 家ハ作多き樹木とい能えなり 武家より
 産するは極多なり
 極の小の心の葉ありてを言つてハ葉色
 淡くして 天子ハ御袍葉極淡と云ふは葉
 別とて用ひては葉は此の量 是れ武家の

九 十張弓考

一 十張弓卷とつゝ書りし十張弓とつゝ一 作紙弓ニ
案治弓ニ篋弓四股形弓又法青弓六羅形弓十
流弓八水早弓九列形弓十白桐弓是也此十張
の制作の或は記し又卯に十二ヶ条弓矢のり紙
裁へ終すと永益女に卯八月十有五日小笠原備前守
持長因氏初少輔持隆次小寛正五年多賀忠
好守亦長因考存考云云と記し次に白弓を
て水鴨ト也之成伊友高木つ幸氏と記せり小笠原
多賀の志と記しこれをも併せ云ふるは白弓の

案作るを〜 十張弓の内十流弓は柳を流り
白桐弓は桐を流りしつゝ柳桐は材よりの
古書に考へたり〜 又西条此の記せり意永寛
正北此を考とつゝ事たり〜 その上小笠原多賀記
遠より流りし物れは十張弓は水鴨り案作ぬり
疑なり〜 水鴨ト也といふ者小笠原流と稱して
併他多記を考りし事あり〜

十 甲冑問答

一 或人問て曰古代の甲冑此制と今世此制といふは
よ遠いなり何のいふなり〜 是或人の答を記す

の大乳以来今世のやうにさうさうと云ふ事何事
何の時代よりと云ふ事何事と推量するに
たうと違ふのり天文十二年 倭炮海軍の事
なま〜古代ハ倭炮の品矢軍にあり史
甲冑此制と矢此の防板の制と倭軍とありて
割られしと包けし作らば也と云ふ所今も
制し〜の所り〜に保氏軍代の澄らぬ令と
名分と稱ふ〜けり〜と云ふ所ハ倭史
たも〜の所り〜と云ふ所ハ倭史を〜と云ふ所
倭炮の機ハ矢よりハ烈〜に倭史甲冑此制度

し〜これを倭史〜作らば〜
志〜倭炮と防〜事張り〜
〜ハ甲冑かり〜多〜冑の吹〜
の板〜ん〜の板〜尾板逆板法角〜の板
胎合也檢令物機法〜に〜者略〜
大神とり〜
神と写〜て作らば世此制と〜
忌〜故なく古制ハ威儀と実多〜
たり制〜今制ハ〜
威儀ハ〜

古製制法新能下より多し其れは近世に
て天正慶長此以割くは成るやうに
あつて乳繩の用少くは又其者比其の上
に巧みなる半取用少くは又其年所
評老を介透るると成るやうに近世
巧みなる底取成るは其用ハ一版と
し其れも物多し其ハ其年取す
働るやうに其上其なる時其物多し其
りて近しくとむくは其物ハ其
用して利するやうに其れは其
ハ其

同 古代ハ甲冑の用は其多し其
密と其なるは其の比其は其用
し其や其是又其代其なる其推す
是又其絶海し其其のり其なる其
中と其も其義と其なる其なる其
其其の其其のり其絶絶海するは
十陰列し其其甲冑の制と其其其
其其其のり其其其其其其其其
略して其其其其其其其其其其
矢石其其其其其其其其其其其

邪りにあふる(肴略)あふる(古代)の礼儀の
おに用ひ存せし礼儀おかしき(古代)の礼儀の
けり(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
九列出陣の時(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
他ふ(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
同(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
腹重(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
法(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
死(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
され(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の

か(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
け(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
法(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
め(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
あ(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
よ(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
を(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
書(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の
同(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の(古代)の礼儀の

利ひ右ハ梅檀の板張用内双方口ハ
言 古きに之段と銘シテ内方ハ
居き四段ナリクニ之板より凡
所身小ありて凡身板融コ
たの之ハ折あり 徹く若
阿ハ鳩尾の板ハ 活車
少(その)の端ハ車金
邪弓より多クハ 古
て居伸自由なる 梅檀板
同 古れぬく 鳩尾の板
居伸自由なる 種

利ひ右ハ梅檀の板張用内双方口ハ
言 古きに之段と銘シテ内方ハ
居き四段ナリクニ之板より凡
所身小ありて凡身板融コ
たの之ハ折あり 徹く若
阿ハ鳩尾の板ハ 活車
少(その)の端ハ車金
邪弓より多クハ 古
て居伸自由なる 梅檀板
同 古れぬく 鳩尾の板
居伸自由なる 種

昔 澄の鳩尾板ハ 吉原より 三巻ある此物あり
少(大)の樽の御きよさゆきけりしやうけし 鳩尾板
取申しして せんたんの板取申す之 吉原の經き道
して 古此樽此貯ふるも 此の樽巻の角丸と
口箱と吉原取申す之

又同せんたんの板のあり 古きしええさう 鳩尾
板のありをとりよ 古きよんをいり
昔 古代せんたんの板とふい 古の物の板をとり
多り 是一果のゆきして 古きよんこれらぬ 此の昔の
一巻しして 双巻うらに 多し人信い せんたんのあり

昔より 白くしと 古の信より せんたんの板より
名付し とうきし 古の飛遠さうに 古の板の
あり 古の板も 鳩尾板も 古きよん 古の板
し 古の板も 古の板も 古の板も 古の板も
二巻此の古の板も 鳩尾の板も 古の板も 古の板も
古の板も 古の板も 古の板も 古の板も

同 大袖の水香此浪の産金物取地の中より
種も 古の板も 古の板も 古の板も 古の板も
古の板も 古の板も 古の板も 古の板も
古の板も 古の板も 古の板も 古の板も
古の板も 古の板も 古の板も 古の板も

くわハ花舞ノ歸りと能くそとひして返り
流角舟を坊しめりて流角不知古制よき流角
はかしたる

向 漢の押舟に流角逆板は是ハ何れなる身
也只勝てしうりや言 古代の漢ハ咽のう
と草とひてしうりや言 漢の漢ハ咽のう
押舟とらるれありて引られハのむりふさる
り心やにうらうらるる脊ハ肩脊のりさ
一ヶ所とさうふたさうたまて一又字のりさ
まり一是脊の肩伸ぶさうりさうりさうり

その透り板かすうりさうり逆板はそ
を逆板はうらうり咽ふりて引られハ
流角は引られハ彼一又字を流角はそ
逆板は上へ引られハの引られハのりさ
これさうりハの引られハのりさハ逆板
くうりさうりハのりさハのりさハ逆板
を流角は引られハのりさハのりさハ
うりさうりハのりさハのりさハ逆板
は引られハのりさハのりさハ逆板
は引られハのりさハのりさハ逆板
は引られハのりさハのりさハ逆板

澄れも袖かへあれははるる地のさるるけり
少く袖の水香此法致おき申すありあはれり
つなきととのさるる徳角の上のさるる運板の隈
より種くあはれなきそはさるるあ袖の水香
の法致ほひあき神くわはるるこのさる
わはるる月あきさるる徳角成あき何と表
正法何とわさるると撰くあはれ及はさるるさる
はるる成あきあはれさるるの邪法成りす
とも利事なりけれ

同 古代の澄れ袖の長さて短き帯 昔古割

網と今世は網もけり長きれも古割ハゆり
法れあき網尾より二寸程けりあき(網)し
かきやうにんゆえ今割ハゆり法二寸程けり
あき網はるるえあき

同 古割のゆり法の法網尾より二寸程けり
ゆりや言 古割ハゆり法の長さ二寸程斗
けり二寸程上よりあき(網)のゆりあき
法のゆりかられてゆり法のゆりあき
今世ハゆり法の法と網尾のゆりあき法の
長さ二寸程けりゆり法のゆりあき

しけおハ何となくけしあ危く古割のやくと
すハ危きよりなり

又同 古割のやうき糸二寸五分より此糸一
細尻より二寸五分より糸より上帯とせハやうき
の糸大方ハ帯小糸あふれて糸柄のやくき
こころより糸の糸あふらんハやくきとせ
世此糸柄ハ喜より帯又布をとらそこら糸
糸柄のよきぬ中に糸ハ古割ハ何とあて
くさくすと初くとこらハやうきの糸はみ
くさふ上帯裁あてしむたきも糸柄の

何とあて糸小ハやうき古割ハ糸柄のこころは
かき手細糸ハ神糸帯布をとりそと
かき手より糸ハ細糸神糸をとりそと
何とあて糸より糸ハ又古割の後の糸柄ハ糸
柄た糸糸柄をとりそと糸柄右の糸柄ハ糸柄
糸ハ細糸の右の糸柄ハ糸柄何とあて糸柄
糸と糸柄より糸より糸

同 古割ハ細の右糸柄とす糸柄をとり
糸と糸柄より糸より糸ハ何の糸
糸と糸柄より糸より糸ハ何の糸

の遣ハハ流石とて流交ハ年々多ク其ノ今世時
ハ終ニトツト由テ和之先脚高トシテ其の
ハもと一ハ流石トシテ其の由テ其の
此のくんとししんて其の指取ハ其の流石
小具其のあまとりんて其の中ハ其のハ仰小
テ和之ハ其の流石トシテ其の由テ其の
肩ハ投を其の流石トシテ其の由テ其の
の遣ハハ流石トシテ其の由テ其の
又云 流石ハ其の流石トシテ其の由テ其の
流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の

しし其の流石トシテ其の由テ其の流石
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
流石ハ其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の
其の流石トシテ其の由テ其の流石トシテ其の由テ其の

へいふく定難く何れのおもへしかしくも扱
 き多しにちんと出り澄の札の厚かほみす
 ともすくかきれしとせし物まよひのり多し
 されども才働きたる由きききりハ澄で
 ためけむりハ忌病多きとさうさうさう
 のまろくもく澄わけても打倒されて死
 せしとさうめくハ人言し多しハ人言し死
 さふれんよんハ人言し多しハ人言し死
 死しとらんハ目見えく多しハ甲冑ハ軽
 下しとらんハ人言し多しハ人言し死

幸舟織成志せりりりハ幸舟織とて火の
 焼さりゆえハ人言し多しハ人言し死
 と路くゆりゆりハ人言し多しハ人言し死
 出大元ハ人言し多しハ人言し死
 がしと病取業ありとハ人言し多しハ人言し死
 何れもまよしやたりハ札の甲冑と帯しと
 走らんハ人言し多しハ人言し死

十一 母夜回音

同云 母夜ハ何のおもへしかしくも扱
 とらんハ人言し多しハ人言し死

古代(中) 陸砲 砲を以て 以て威改を以て
城の中より 雨れぬく 矢を射つるを以て 任を以て
振るまきには 母を以て 押寄るといふ 砲の
かこふ人の中に ありける 台のりし 時のりし
危く 塩裏抄く 武士 降戦 場時 被僕 以て 防敵
矢といふなり 又之代 実派 卷十七
天和元年 貞觀十二年 二月廿六日 紀
對馬 島より 少将 船長 春風 以て 進 起 法系
起法系 形を以て 曰
軍務 以て 艦臺 在 女 胃 能 爲 助 以 保 保 啓 信 傳
造 洞 布 保 保 衣 子 以 以 法 不 意 といふなり
斯文の意に 軍務の用を以て 女胃 女胃 有
女胃 女胃 有

とらひしを以て といふも 保保 砲を以て 護
胃のまきなり 仰りおられ 法を以て 洞 洞 年 貞
洞 不 布 衣 以て 保 保 衣 子 以て 能 爲 助 以て 不
意 以て 韓 の 所 由 以て 改 束 時 の 利 以て 改 束 以
て 以て 保 保 衣 子 以て 女 胃 能 爲 助 以て 以て 保 保 衣 子
らふひしなり 女胃 射を以て 矢の 能 振 以て
保 保 衣 子 以て 右 此 塩 裏 抄 之 代 実 派 の 文 也
以て 古代の 母衣の 利 以て 考 以て 以て 保 保 衣 子
海 以て 好 以て 軍 以て 以て 以て 改 束 時 の 利 以て 以て
ありしなり 女胃 以て 陸 砲 以て 利 以て 母 衣 衣

をと臨く事しきられしうあく好まぬ母家は何の故
小五郎、知れぬ事になりし也、向く信後と云ひ
ふも、之好代に母家とて、無き所く事なき也、
絶て、そのの切なれども、ひきしう有来りし也、
それ、控し、多し、し、い、あ、と、包、も、慶、も、あ、
捨、也、の、終、り、あ、し、し、母、家、此、割、に、な、り、此、終、り、し、
え、自、平、く、著、し、し、母、家、推、考、し、し、し、小、五、郎、
他、し、これ、に、家、に、也、い、品、も、大、細、と、云、ひ、を、著、
あり、又、何、を、著、し、し、洗、と、い、し、し、し、し、し、し、し、
洗、に、あ、り、お、れ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

我ハ母呂漢北王良ク、始ク、し、つ、て、又、法、良、ク、
始ク、も、禁、令、ク、始ク、人、と、し、つ、後、所、れ、も、
あ、り、ん、の、氏、皆、家、事、し、し、し、元、に、是、の、氏、或、ハ、
洗、と、い、し、也、と、い、し、也、也、此、母、家、に、何、を、し、し、
あり、幸、活、所、今、此、洗、所、是、又、と、い、し、し、し、
に、洗、り、方、て、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
又、同、種、子、贖、と、云、人、あり、家、此、代、の、大、儒、と、云、
兵、士、と、云、此、人、の、著、し、し、し、強、兵、的、と、い、し、
小、漢、之、後、と、い、し、篇、あり、し、し、篇、の、中、に、母、家、
あり、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

昔曰 残儀兵衛と云ふ事と流してさしり
まゝふ太公望婦人よ化して諸良の善行六韓
と授け好に母家取授しる代地は終りに太公
望の親世音あり 荻石公ハ摩利支天之人と
善ハ弟の文と川と知と有りて文章を扱
日知の忍勝海字れおぬをその作と云ふこと
作といふとい人の伝ふ事少く後子勝り名とり
たつゆあること文章の事ハ有りて知さる事
眼と云ふこと有りて死物又ふ事と云ふ事
の目と云ふことありて書物と云ふ事ハあり

傳傳の書にええたることハ取らざる

十二 武士字又同書

一 同日 武士ハ武藝取勵み多し 学文は
に及びぬ者此るハ不知もする國を治るは
欲流るし 十ハ心は自らして武道は善とあり
也也と云人有りて善言 学文は此れを意ハ夜
の事取知る事ありし又善行傳り而後
ふしきありし有りて人の心は自らして身
行ひと云ふことせんが為之 夫人ハ又傳の行り
君臣父子夫婦 長幼朋友 是れハ又傳の事

形ひよと道といふを道取あきく知んぬる
人のまを懐名口教と同と學又といふを
張委く知りしうもその身の形ひ何し
學文せしむら同し　　まを身に記す
人といひ五倫の及ぶをさき
惡人といふ武藝之何種
及んば背き遠り人
及んば文武あはれといひ
及んば武藝人の
及んば武藝人の
及んば武藝人の

一礼と徳の及んば
用ひ巧みといふも
虎我逐おして
後世送す
學文せしむら
かたしき

冬

尾

Handwritten text in vertical columns, likely a list or record. The characters are faint and difficult to read, but appear to be in a traditional East Asian script. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, with some characters appearing to be numbers or specific identifiers.

